

ネーチャーゲームで環境教育を

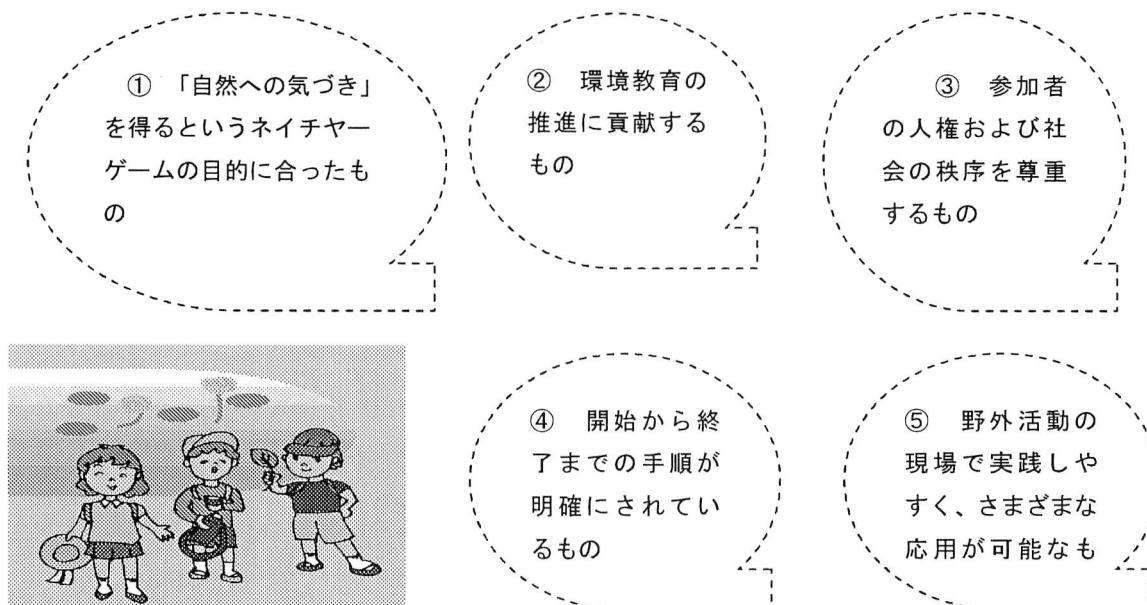
自然に囲まれていない環境の中でもネーチャーゲームはできます。ちょっと外へ出て自然の空気を吸うつもりで体験してみませんか。

ネイチャーゲームゲームは、1979年にアメリカで発表され、1986年以降に日本で普及されてきた自然体験活動プログラムです。このプログラムは、五感で自然を感じ、自然と一体感を感じるという「自然への気づき」を主目的とした100種類以上のアクティビティで構成されています。

※「アクティビティ」とは、30分～1時間程度で行われる個々の活動単位のこと、ネイチャーゲームでは個々のゲームがこれにあたります。

現在日本ネイチャーゲーム協会では、109のアクティビティを認定しています。

アクティビティの定義として次の5つの条件をみたしていることが必要です。



よし！指導のためのアドバイス

こどもたちと自然の中へ出かける前に、教える立場にある私たちの役割について考えましょう。

1. 「教える」よりも分かち合おう

知識(たとえば「これはツガの木」などということ)を与えるよりも、このツガの木についてその場で心に感じていることを子どもたちに伝えるほうがよい効果を生み出します。

2. 指導者は受け身でいよう

子どもの反応に敏感になること。これは、子どもと一緒に活動する時に最も大切な態度です。野外では、

子どもは自発的に何かに興味を示してきます。あなたはそれを持って、たくみに自然の学習へと興味をふり向けていけばよいのです。まず、自然に対する子どもの反応に敏感になりましょう。子どもからの質問、意見、自然に対する驚きの言葉、どれをとってもみな会話を始めるきっかけになります。また、子どもたちの雰囲気や感情にも敏感になりましょう。そして、子どもたちがもっている自然への興味の芽を、あなたの力で伸ばしてあげましょう。子どもたちがそれぞれすばらしい芽をもっていることに気づきさえすれば、あなたはごく自然にそれを伸ばし花開かせることができるでしょう。

3. チャンスを逃がさないで

野外活動の導入段階で、問い合わせたり、おもしろいものや音で興味をそそったりして、できるだけ子どもの関心をひきつけてしまいましょう。子どもたちは、ふだん自然を間近に見るという経験が少ないものです。何かおもしろいものを見つけてきて、そこから少しずつわざしい観察に導いていくのがよいでしょう。子どもたちの発見を一緒によろこぶという態度が大切です。

4. 体験第一、解説は二の次に

木の名前や特徴などを教えようとしてはいけません。子ども達は興味があれば自分で調べだします。

5. 楽しさは学ぶ力

にぎやかな活動でも、静かに精神を集中する活動でも、楽しかった体験を子どもたちは決して忘れません。この時の楽しさを忘れずにいさえすれば、子どもたちは自然にもっと知りたいと思うようになるはずです。

ゲームの例

(1)木の鼓動

木も生きています。私たちと同じように、食べたり、休んだり、呼吸するだけでなく「血液」さえも循環させているのです。生命の流れは・コポコポ、ゴーゴーというすてきな木の鼓動となって聞こえます。この音を聞くには、間もなくやってくる生長の季節にそなえて、木々が、吸い上げた水を枝から枝へと盛んに送り始める早春がよいでしょう。

幹の直径が 15cm 以上あって、樹皮のうすい木を探してください。落葉樹は針葉樹にくらべて鼓動が聞きやすく、また同じ種類の木でも聞きやすい木と聞きにくい木があります。聴診器を木に強く押しあてます。雑音が入らないよう、動かしてはいけません。よく聞こえる所をあちこち探してみましょう。

子どもたちは、聴診器で自分の心臓の音も聞いたがるでしょう。

動物や鳥たちの鼓動もためしてみてください。音とリズムがそれぞれ違っていて、思わずひきこまれてしまうことでしょう。



(2) 目かくし歩き

目かくし歩きはとても簡単です。子どもと大人、または子どもどうしのペアをつくります。最初にどちらが先導者になり、どちらが目かくしをするか決めます。先導者は、足もとの倒木や枝に注意しながら、パートナーを魅力的なルートに案内するのです。手をとっていろいろなものに触らせたり、不思議な音やかわった匂いのする所へつれていったりしてください。リーダーはその際、先導者はどうやって安全にパートナーをリードすればよいかを実際にやってみせ、先導者にパートナーの目であることをしっかり認識してもらうようにしてください。

人は誰でも新しいことに挑戦するとき、時として神経質になり、悪ふざけをしたり笑ってごまかしたりしてしまうものです。子どもにとっては、目かくしをするという経験が初めての場合が多いので、つぎに紹介するゲームを目かくし歩きの前に行うと効果的です。

まず輪になって座ってもらい、目を閉じるように言います。そして、これから順々に「何か」をまわすので、匂いをかいだり触ったり、時には音を聞いたりして、それが何であるかをあてるよう言います。つぎの人に手渡す前に自分が気づいたことを教えて、一緒に考えてもらいます。



(3) 私の木

これも2人以上でするゲームです。まずペアをつくって、パートナーに目かくしをします。そして森の中であなたがいちばん気に入った木の所についてください(その木までの距離は、パートナーの年齢や方向をさぐる能力にもよりますが、小さい子どもをのぞけば20~30m でもそう遠くはありません)。

つぎに、目かくしをした子どもが木のまわりをさぐり、その特徴をつかむのを手伝ってあげましょう。なるべく具体的なヒントを与えたほうがいいようです。たとえば「どんな感じがする?」と聞くより「ほっぺたで木に触ってごらん」と言ったほうがずっと興味をひきます。「木を調べてごらん」と言うかわりに、「この木は枯れ木かな?」「両手でかかえられる?」「この木は何歳ぐらいだと思う?」「木の皮に何か生えてるかな?」「動物がすんでいるだろうか?」「コケがついているかな?」などのヒントがいいでしょう。

パートナーが木を十分調べたらもとの場所へつれて帰りますが、まっすぐもどってはいけません。

もどったら目かくしをとり、さっきの木を探させます。子どもたちは、自分の木を探すうちに、森の木は1本1本特徴をもっていることに気づくはずです。自分の木が見つけられたら、その子にとって生涯忘れられない経験となるでしょう。つぎの年にまたやって来た子どもたちが、こう言います。「見て!これがぼくの木だよ」

(4)音いくつ

このゲームは、森や草原、湿地、あるいは公園など、どこでもできます。グループになってあおむけに寝ころんで、手を上にあげます。そして、まわりの音にじっと耳をすませ、鳥の声を聞きましょう。違った鳥の声が聞こえたら、それをひとつひとつ指で数えていくのです。さあ、誰がいちばんよく聞きとることができるでしょうか。これは、子どもたちに自然のいろいろな音、あるいは自然の静寂さを気づかせるのに、とても優れた遊びです。

鳥の声を開くのになれてきたら、鳥の声以外の音を10個数えてみましょう。また、動物の声やその他の物音を聞いてみましょう。草原をわたる風の音、木の葉の落ちる音、水の流れる音など、あらゆる音に耳を傾けてみましょう。

(5)色いくつ

まわりの景色を見てごらん。どんな色が見えるかな？ 濃い色、薄い色があるかな？」

こんな質問は、子どもたちをこれまで以上に、身のまわりの情景に気づかせることになるでしょう。

(6)私のサイト(とっておきの場所)

豊かな自然が残る地域に出かけ、そこで方々へ散らばり、各々自分だけのお気に入りの場所(サイト)を見つけてみましょう。年齢の小さな子どもがいる場合は、境界線をはっきり決めて、常に参加者全員が視野に入っているよう心がけたほうがよいでしょう。

参加者に、ある程度の時間(25~40分くらいがちょうどよい)を与えて、各々気に入った場所を見つけ、思い思いに表現するように言ってください。ぜひとも、いちばん心ひかれるものを選び、お気に入りの場所を表現してみてください。そして招待状もつくります。時間が来たら、探検家たちはもどり、2人1組になって、お互いに自分の場所を紹介し合います(20分くらいとってください)。

その後、再び集まり、今度は全員で見つけた場所について話し合います。

自分のいちばん気に入った景色をスケッチすれば、そこに友だちを案内する時、その絵がガイドがわりになるよね、などと言ってみます。

参加者全員が、自分の気に入った場所を見つけることができるような一帯を選びます。しかも一斉にもどってくることができるよう、配慮が必要です。ですから、リーダーは、参加者がどこで何をしているか見回る必要のあることを、あらかじめ言っておきましょう。

お気に入りの場所を見つける

とっておきの場所ガイドを記入する—35分

友だちに自分の場所を紹介する—20分

グループで話し合う—15分